

ネコ（猫）と日本語

—— ネコ（猫）に係る慣用表現とその背景 ——

<https://doi.org/10.5281/zenodo.15569452>

小池 里奈 Rina KOIKE

学士

タシケント国立東洋学大学

日本語教師

Abstract. Taking up cats, which have been kept as pets since ancient times in Japan, we study the origin of the name "cat" and also study, from a linguistic standpoint, idioms and proverbs including a word "cat" that have arisen and been used in relations between humans and cats. We investigate the function of particles "wa" and "ga" in idioms and proverbs that have "cat" as a subjective word. We also investigate their function in relation to the subjective word in idioms and proverbs that have "cat" as an objective word. Based on these considerations, we try to understand that the meaning of idioms and proverbs including a word "cat" can be determined in relations between humans and cats from ancient times to modern times.

Keywords: Neko, Cat, Idiom, Japanese grammar, Case particles, Special particles

1. 序論

古来から日本列島に住み着き日本人と生活を共にしてきた小動物であるネコ（猫）（特にイエネコ）を取り上げ、単語：「猫」に係る日本語の言語表現について、慣用表現を例に挙げて言語学的な考察を加える。現代においても人間と共に生活している小動物を指す名詞：「ネコ（猫）」の源流は明確には判っていないが、古代の日本語である大和言葉の発現の時代にまで遡ることはできる。以来、「ネコ（猫）」は現代までの歴史の中で様々な日本語表現の中で使われ、豊かな意味を与えられ、さらに、それらの意味との関わり合いに於いて「ネコ（猫）」に係る表現は淘汰を受けてきた。慣用句、成句、や諺などの慣用表現の中にそれらの歴史を見て取ることができる。言語の構造が言語の構成要素である単語の意味内容によってどのように影響を受けるかを言語学の立場から考察を加えることは「言語」の理解を深める上で大変重要な視点であると考えられる。猫と人間の長い共生の歴史が「ネコ（猫）」を含む「文」を育んできたことを考慮するならば、「ネコ（猫）」の慣用表現」を言語構造の観点から分析し研究を進めることは大変有益である。文中に単語：「ネコ（猫）」を含む慣用句、成句、や諺などの慣用表現を文献中から収集し、これらの慣用表現の言語構造を分析し、人間との長い共生の歴史を持つ小動物である猫が文や句の中で表現されるとき、「ネコ（猫）」の持つそのような背景が文や句の構造にどのような影響を与えるかについて研究する。とりわけ、

名詞に膠着して使用される格助詞の「が」と取り立て助詞（副助詞）の「は」の用法の分析を行い、名詞である「ネコ（猫）」との相関関係（correlation）について調べる。

このような解析においては、着目する単語である「ネコ（猫）」が表す小動物と人間の関わり合いの蓄積を歴史に沿って調べ理解しておくことは避けられない。そこで、解析に先立って、「ネコ」の日本への渡来の歴史、「ネコ（猫）」という言葉の源流、そして、平安期から江戸期を経て現代にいたるまでの日本人の猫との関わり合いについて調べる。

日本における猫と人間の緊密な関係の中から発生した猫に関わる慣用句、成句、や諺を言語学的な立場から分析することによって、日本語の文法における、単語の意味と言語の構造が互いに関わりあって作り出されている複層的な構造について考察を行う。単語の意味と言語の構造が互いに関わりあって作り出されている文章の複層的な構造について考察を行う上で、事例となる単語の選択は極めて重要である。具体的ではあるけれども普遍的に知られた単語を採用することにより、形式的な定義に依存することなく、科学的に厳密な議論を展開することができる。

本論考では「ネコ（猫）」の慣用表現の分析研究によって、単語の意味と文の表現が互いに相関（correlate）するよう見える事例が提示される。膠着語のひとつである日本語において助詞（particle）の選択が使われる名詞の意味に影響されるよう見える事例があることが指摘される。このことは言語の構造と単語の意味が互いに独立ではないという自然言語の特質に沿ったものと言え、本研究は、理論的には日本語もその範疇に入る、との主張をなすものである。この点を考慮することによって、日本語による文章表現を行う際に、使用する単語の歴史的背景や文化的背景を斟酌することの実践的意義が理解される。

2.猫の日本史、「ネコ」の起源

最近の研究により、現代の日本で暮らす家畜の猫、家猫（イエネコ）に直接つながる祖先は平安時代の九州に本格的に渡来し、その後鎌倉時代に入って大きく増え、さらに日本列島を北上するように広まったことが明らかになりつつある[1, 2]。遺伝学的に遡ることができる「ネコ」は平安時代までと明らかになったとはいえ、さらに遡る時代に日本人によって「ねこ」、「ねこま」、あるいは「狸（り、ねこま）」と呼ばれて親しまれた動物が日本列島に居たようである。飛鳥時代から奈良時代にかけて、猫に似た動物を総称して「狸（ねこま）」と呼んでいたようである。その中には現代のヤマネコに繋がる「ネコ」も居て現代とは異なり人間の生活圏の中にも数多く生息していたようである。現代のイエネコに繋がる種が居たか否かについては科学的には判っていない。文献史料に猫が登場し始めるのは平安時代からである[3]。「今昔物語（1120年代以降に成立）」の「大蔵大夫藤原野清廉、怖猫語（おおくらのだいぶふじわらのきよかど、ねこをおそるること）」の中にネコ嫌いの男の話が出てくる[4]。そして、この物語の時代には「ネコ」は既にありふれた動物であったと推察される。しかし、これらが現代の日本で暮らす家畜の猫、家猫（イエネコ）であったとの確認はできていない。現代の家猫（イエネ

コ) に繋がる猫が平安時代あるいは奈良時代に大陸から渡ってきたとの説は、遺伝子解析の結果 [1, 2] と矛盾しない。しかし、それ以前にも「狸 (ねこま) 」が日本列島に棲んでおり、市中で暮らしていたこともまた確からしい。他方、平安時代の文献には「唐猫 (からねこ) 」という言葉が登場する[5, 6]。そして、こ

の唐猫は当時とても珍しい動物であった。

中世の頃までは猫は大変貴重な動物で、猫は図 1 のように紐に繋いで飼育するのが普通であった。そこで、繁殖の機会が得られず、猫の数があまり増えなかった。



図 1. 「石山寺縁起絵巻」

(1324年～1805年にかけて制作)

裕福な商人の家で紐に繋がれた猫。

猫が増え始めたのは戦国時代から江戸時代にかけての時期といわれている[7]。1602年に京都所司代は徳川家康の命により“猫放し飼い令”を發布し、猫に“ネズミ捕りパトロール”をさせることにした。このことは日本の猫の歴史にとって大きな転換期となった[8]。自由になった猫は繁殖の機会も得て、猫の数は増えていくことになった。大きく花開く江戸文化の中で、猫は上流階級から庶民までのあらゆる階層の人々の間で様々な文化的作品に取り上げられて百花繚乱の時代を迎えた。図2のように浮世絵にも多くの猫が描かれた。

図 2. 歌川国芳 (1798-1861) による『其のまま地口 猫飼好五十三疋』。



「ネコ」と「猫（ビョウ）」は、日本語において同じ動物を指す言葉である。ただし、「ネコ」は大和言葉、「猫（ビョウ）」は漢語に由来する言葉である[9]。ネコは古代に大陸からもたらされた動物であるとされているが、中国語由来でない「ネコ」という名前を持っている。このことは、「ネコ」が漢字以前に大陸から渡来したか、あるいは、日本列島に住み着いて日本人に親しまれる中で漢語とは異なる名前、和語としての「ネコ」を与えられたかのいずれかである可能性を示唆している。前掲の議論に従えば後者の可能性が高いと考えられる。

文献史料に猫が登場し始めるのは平安時代からである[3]。日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』に猫の存在を確認することができる[7]。「猫」は奈良時代から平安時代初期にかけて、遣隋使や遣唐使らの船に乗せられ、仏教が伝わると同時に持ち込まれたとされている。中国では、猫が仏教の大切な経典や重要書物をねずみから守る使役動物として活躍していた。そのため日本に仏教が伝わる際にも、経典や重要書物とセットで猫が持ち込まれたとされている。ネコを表す漢字「猫（ビョウ）」も同時に伝わったと考えられる。

平安時代の文献には「唐猫（からねこ）」という言葉が登場する。唐（618年-907年、中国）から渡来の猫という意味で唐猫と呼んでいた可能性が考えられている[5, 6]。そして、この唐猫は当時とても珍しい動物であった。例えば、『源氏物語（1001頃から執筆が始まり1021年頃までに完成）第34帖 若菜上』には、柏木が女三宮に近づくために彼女が飼っている猫を盗もうとするエピソードが描かれている。唐猫（からねこ）は珍しく貴重な動物であったが故に、特に貴族や高僧の間で珍重され、その神秘的な力や美しさが語られることがあった。貴族や皇族の館の奥深くに住んでいるという、その神秘性や近寄りがたさゆえに唐猫が年を経て猫又（または猫股）（ねこまた）年老いた猫が妖怪化したもので、尾が二股に分かれていることが多い）になると考えられることもあった（図3）



図3. 鳥山石燕『画図百鬼夜行（1776年）』より「猫また」
猫の尾が2本に分かれている。

そして、後世の庶民の猫に対する嗜好にも影響を与えたと考えられている。また、「ネコ」についての「魔性」を伴った言葉や成句を導くことになったのかも知れないと考えられる。

時代が下がって江戸時代になると「ネコ」が町中に放たれて暮らすようになり[3] (図 2)、「ヤマネコ」はあまり見かけることは無くなったので、「ネコ」は単に「ネコ」と呼ばれるようになり、「唐猫」は死語になった。今日では、「ネコ」は単に「猫 (ネコ: 訓読み、ビョウ: 音読み)」と呼ばれている。ただし、「ビョウ」は単独で「ネコ」の呼称になることはない。「愛猫家 (アイビョウカ)」のように、熟語の中で用いられる。

3. 猫の成句、諺

3.1. 猫跨ぎ (ねこまたぎ)

「猫」が主語、「跨ぎ」は動詞の「跨ぐ(straddle, 英語)」が名詞化された表現である。文法的には間に入るべき助詞が省略されている。格助詞の「が」を用いた「猫が跨ぐ」と取り立て助詞 (副助詞) の「は」を用いた「猫は跨ぐ」のどちらが正しいのかを考察することができる。言語の構造論からはどちらも正しいのであるが、ネコという動物の人間との係わりから考察すると、この成句を含む文の中で、この成句の意味が文脈の中で確定され、「猫が跨ぐ」が正しいことが導かれる。

「猫跨ぎ (nekomatagi)」とは“猫が跨ぐほどの不味い魚”、敷衍して表現すれば、“あの悪食の猫でさえもが食わずに跨いで通り過ぎるほど食味の悪い魚”の意の慣用句である。この表現は都市が発展し魚を遠くから運んで来て食べるようになった時代に現れた。運搬に時間がかかると魚は傷み食べられないほど不味くなるからである。

取り立て助詞 (副助詞) の「は」は主語を強調する働きがあるので、「猫は跨ぐけれども虎は跨がない」は“跨ぐのは誰なのか”を識別する表現として自然な表現である。しかし「猫跨ぎ」とはかけ離れた意味になる。対して、格助詞の「が」は述語を強調する働きがあるので、「猫が跨ぐ」であれば述語の「跨ぐ」が論点の主要部分になり、「猫」は「跨ぐ」という動作をする動物の一例を示すのみの働きを与えられる。「猫」も「虎」も「兎」も「犬」も皆跨いで通るけれども、最も例外となる筈の「猫」でさえも「跨ぐ」との意味になって跨ぐ対象を極限まで強調し、「猫跨ぎ」の意味するところを正しく表す表現となる。

3.2. 窮鼠猫を噛む (きゅうそねこをかむ)

「窮鼠猫を噛む」(きゅうそねこをかむ) は、絶体絶命の窮地に追い詰められた弱者が、強者に対して反撃することを意味する諺である[10]。この諺は、猫に追い詰められた「ネズミ (鼠) (rat, 英語)」が、逃げ場を失って必死に猫に噛みつく様子から来ている。

『窮鼠猫を噛む』の語源は、中国・前漢時代（BC206～AD8）の書物『塩鉄論（えんてつろん）』に登場する文章である[11]。中国語由来の「窮鼠猫を噛む」を日本語に直して理解するときには助詞を付加しなければならない。主語を指す代表的な助詞には取り立て助詞（副助詞）の「は」と格助詞の「が」の二つがあるので、両者を使い分けることによって文のニュアンスを補完し文を豊かにすることができる。「窮鼠猫を噛む」からは、「窮鼠は猫を噛む」と「窮鼠が猫を噛む」の二つの文が導かれる。「は」と「が」の機能を考慮して両文を敷衍して解釈してみると次のようになる。

「窮鼠は猫を噛む」→ 弱い動物であるネズミ（鼠）でさえも追い詰められて困ったとき（窮）は猫に立ち向かい猫を噛むものである。

「窮鼠が猫を噛む」→ 追い詰められて困っているネズミ（窮鼠）が、驚いたことに猫に立ち向かい猫を噛んでいる。

取り立て助詞（副助詞）の「は」は主語を強調し主語の行為の一般性を主張する働きがあるので、「窮鼠は」とあれば、“窮鼠のような立場に立たされた者は誰でも”という、もともと、「塩鉄論」で論じられた内容を反映する表現になる。他方、格助詞の「が」は主語を強調しそのうえで主語の行為に焦点を当てる働きがあるので、「猫を噛む」が注目の対象になる表現になる。

3.3. 上手の猫が爪を隠す（じょうずのねこがつめをかくす）

「上手の猫が爪を隠す」（じょうずのねこがつめをかくす）は、本当に能力のある人はその才能や技術をひけらかすことなく、控えめに振る舞う様子を表す諺である。江戸時代の俳諧集『毛吹草』（1638年）に見られる。猫が普段は爪を隠しているが、必要なときにはその爪を使って獲物を捕らえる様子から来ている。つまり、実力のある人が普段はその力を見せびらかさず、必要なときにだけその力を発揮するという驚きを表している。

類似の諺に「能ある鷹は爪を隠す」（のうあるたかはつめをかくす）がある。安土桃山時代の諺集「北条氏直時分諺留（ほうじょううじなおじぶんことわざどめ）」（AD 16C末 - 17C初）に記載されていることが確認されている。この諺の由来は、鷹（タカ、hawk, 英語）の習性にある。鷹は非常に鋭い爪を持っているが、獲物を捕まえるまではその爪を隠しておき、獲物に近づいた瞬間に爪を出して仕留める。この行動が転じて、実力のある者ほどそれを見せびらかさないという意味になった。「上手の猫が爪を隠す」と「能ある鷹は爪を隠す」は基本的に同じ意味を持つ。しかし、後者では取り立て助詞（副助詞）「は」が使われ、前者では格助詞「が」が使われており、「上手の猫は爪を隠す」と「能ある鷹が爪を隠す」のように両者が逆に使われたり、混用されることはない。このことは、助詞「が」と「は」の機能の違いのために「上手の猫が爪を隠す」と「能ある鷹は爪を隠す」に意味の違いが生じており、使われる場面も異なって来ることを示唆している。助詞の「が」と「は」の働きの違いから来る意味の違いは次のように説明できる。

格助詞「が」:

- ・主語を強調し、そのうえで、主語の行動に焦点を当てる役割がある。
- ・「上手の猫が爪を隠す」では、「上手の猫」という主語が強調され、特にその猫が爪を隠すという行動をしていることに焦点が当たる。

取り立て助詞（副助詞）「は」:

- ・主語を他と比較して強調し、行為の主体が主語であることに焦点が当てられる。
- ・「能ある鷹は爪を隠す」では、「能ある鷹」という主語が提示され、その鷹が爪を隠すという行動を「能ある鷹」であるからこそ行う行動であること、そして「能ある鷹」ならする一般的な行動であることを示している。

3.4. 猫は禿げても猫（ねこははげてもねこ）

「猫は禿げても猫」という表現は、猫は毛が抜けて禿げても猫であることに変わりはないという意味から、表面的な変化があっても本質は変わらないことを示す表現である。この表現の由来や原典については、具体的な出典が明確に示されているわけではないが、一般的には日常の観察から生まれたものと考えられる。

この慣用句は「A は B でも A」という形式を持っている。B でないことは A が A であるための必要条件ではない、すなわち本質的で欠かせない事柄ではないことを表現する。

A = 猫、そして、B = 禿げる、として、 $B \rightarrow \text{Not } A$ が「偽」であると述べている。従って、 $A \rightarrow \text{Not } B$ も成立しないと主張している。

A と B は例えば「猫」や「禿げる」以外の語に代替することは可能で、例えば、「猿は禿げても猿」、「猿は木から落ちてても猿」、あるいは、「猫は木から落ちてても猫」のように構文上は色々な変化形が考えられる。現実に使われる慣用句の中で「A = 猫」が選ばれているのは、古くからの人間との関わり合いの中で愛くるしく、かつ、神秘的な小動物として人間に愛されてきたという歴史が背景にあると考えられる。「B = 禿げる」が選ばれたのは毛が在ることは重要だけれどもそこが猫であることの本質ではない事柄であるからだと考えられる。「禿げている」ことは猫である為の本質的な要件では無いことは、古来から猫を見てきた人間には全くの既知であるが故に、あえて、「B = 禿げる」を採用することによって慣用句の論点を際立たせることが出来るのだと考えられる。

「猫は禿げても猫」の主語「猫」に取り立て助詞（副助詞）「は」が宛てられていることは、上記の考察から自然に理解できる。「は」は主語を強調し、述部に表現される事柄が一般的に成り立つ事柄であることを示す働きがある。「は」を用いることによって「禿げても猫」が一般的に成り立つことを強調することができる。

4. 猫の言語学

成句、格言、諺、や慣用句は通常非常に短い文や句として表現され、会話や文章の中で使われるとそれらの内容を豊かにし、かつ、品格を高める働きがある。成句等は意味が凝集された短い文や句で表現されるために、それらを構成する単語はその成立の歴史や人間との係りの歴史など、背景となる事柄を背負って登場する。この背景となる事柄を会話の話し手と受け手の、文章の書き手と読み手の共通の理解として前提することによって初めて、意思伝達や情報伝達的手段として成り立つことになる。

成句や諺等は、短い構文で意味を伝えようとするために、助詞が省略されたり、逆に助詞を置くことによって内容を強調しようとする場合がある。また、中国語由来の句の場合には助詞を欠いていることがある。日本語の最も簡単な構文は、「主語」を S、「目的語」を O、そして、動詞を V、として、

S-O-V あるいは S-V

の形を取る。S と O には通常助詞が付随する。これをそれぞれ p および p' と表すことにする。すると、日本語のもっとも簡単な構文は

Sp-Op'-V あるいは Sp-V

となる。このような短い構文においては、文の意味内容を決定するうえで助詞 p が大きな役割を果たす。主語につく代表的な助詞 p には「は」と「が」の 2 つがある。

p = 「は」と「が」の文 Sp-O-V および Sp-V 内での働きについては次のことが成り立つと考えられる

。

・p = 「は」: テーマを提示する助詞であり、一般的な事実や普遍的な事柄を述べる際に使われる。Sp-Op'-V および Sp-V の中で、S を強調し、その上で、S による行為 V が S にとって一般的であることを主張する。例えば、

「(S=能ある鷹)(p=は) (O=爪) (p'=を) (V=隠す)」

の場合、「能ある鷹」という一般的な存在がテーマとなり、その行動が普遍的な事実として述べられている。

・p = 「が」: 特定の主語を強調する助詞であり、具体的な事例や特定の状況を述べる際に使われる。Sp-Op'-V および Sp-V の中で、具体的な存在として S を強調し、その上で、論の焦点を S による行為 V に当てる。例えば、

「(S=上手の猫) (p=が) (O=爪) (p'=を) (V=隠す)」

の場合、「上手な猫」という特定の存在が強調され、その行動が具体的な事例として述べられている。

このように、助詞「は」と「が」の使い分けによって、同じ意味を持つ慣用句でも微妙なニュアンスの違いが生じる。これにより、表現の幅が広がり、より豊かな言語表現が可能となる。

5. 結論

日本に於いて古来から愛玩動物として飼育されてきた「猫(cat, 英語)」を取り上げ、日本における「猫」の歴史と「猫」の呼称の由来について考察し、その上で、「猫」の人間との係りの中で発生し使われてきた「猫」を含む成句や諺について言語学的な立場から分析した。「猫」を主語とする成句や諺について、格助詞の「が」と取り立て助詞（副助詞）の「は」の使い分けについて詳しく考察し、さらに、「猫」を目的語とする成句や諺についても、主語との関係における助詞の「は」と「が」の使い分けについて詳しく考察した。

格助詞の「が」は主語を指示し述語に論の焦点を当てる働きがあり、取り立て助詞（副助詞）の「は」は主題を提示し述語が主題に対して一般的に成り立つことを示す働きがあるが、これらが、短い文、すなわち、成句や諺の中で使われた時には成句や諺の主張を際立たせ強化することを詳細な分析によって明らかにした。

参考文献

- [1] 松本悠貴, “遺伝子から見たネコの世界”、*milsil*、国立科学博物館、15, No.2, 6-8 (2022)。
- [2] 松本悠貴、中村保一, “猫のゲノム獣医療研究の最前線”、猫の臨床専門誌「フェーリス」、18, 128-132 (2021)。
- [3] <https://moffme.com/article/1854>
- [4] 桐野作人、吉門裕, “猫の日本史” 戎光祥出版、2024年1月10日初版初刷
- [5] 小林明、DIAMOND online、2024年2月11日
<https://diamond.jp/articles/-/338674>
- [6] 柴内晶子、日本獣医史学雑誌 59 (2022) pp. 1-20
- [7] 大島建彦 校注・訳: 猫の草紙, 御伽草紙集, 日本古典文学全集36, 小学館 (1974)
- [8] <https://ja.wikipedia.org/wiki/日本国現報善悪靈異記>
- [9] <https://nekochan.jp/column/article/16529>
- [10] <https://yoji.jitenon.jp/yojie/2485>
- [11] 窮鼠猫を噛む - ウィクショナリー日本語版 (wiktionary.org)

